私のテーマ

蝦夷地をめぐる 松浦武四郎と龍馬の関わり

ノンフィクション作家
札幌市在住
合田　一道

拙著『龍馬、蝦夷地を開きたく』を出版したのは2004年だから、もう17年も前になる。北海道龍馬会の設立に関わったのを機にまとめたのだが、道内でもその事実を知る人は少なく、龍馬ブームにも後押しされて大きな反響を呼んだ。

龍馬が蝦夷地を目指しながら断念した話を耳にしたのは、新聞記者をしていて坂本家本家の坂本直行さんと出会った時だから、半世紀以上も前になる。だが直行さんの〝いごっそう〟ぶりにためらいを感じて、書くのを辞めた。その意味では遅れたとはいえ、いい時期の出版だったと思い返している。

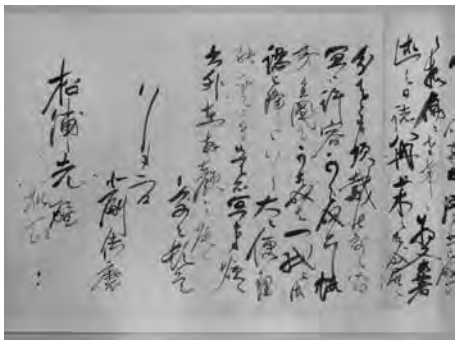
出版してから

本を出して後、著者の存在を知って、龍馬に関わる新しい情報を持ち込む人が目立った。龍馬の意志を継いだ甥に当たる坂本本家の直寛が、北海道・北見に入植した後、キリスト教の牧師となり、受刑者や戦地へ赴く若者に励ましの説教をした話や、龍馬家を継いだ坂本直（高松太郎）の妻トメが夫亡き後に、直寛を頼って北海道・浦臼に移住した後の話などなど。ある時は、トメの係累と名乗る男性が現れ、トメの便りのコピーを見せられた。トメは京都で催された龍馬の回忌法要に出席するため京都に赴き、在京中、龍馬が暗殺された近江屋に宿泊した。それに対する礼状なのだが、その中身について尋ねられて、大いに面食らった。

北添からの便り

身震いするほど驚いたのは、三重県松阪市の松浦武四郎記念館から、北添佶磨の武四郎宛て便りが2通ある、という情報だった。龍馬の同志である北添は、龍馬が蝦夷地を目指す前年の文久3年（1863）5月2日、能勢（瀬）達太郎、小松小太郎らとともに、密かに越前敦賀から船で蝦夷地へ向かった。龍馬の指示によるものと思われる。

蝦夷地を見て歩き、7月8日に江戸に戻った北添が、武四郎に便りを出したのは7月24日だが、その内容から帰国してすぐ武四郎に会い、蝦夷地に関わる8冊の書物と蝦夷地全図がほしい、と頼んでいる。もう1通は8月26日付けで、書籍などを受け取った礼をしたためている。



北添佶磨の松浦武四郎宛の便り
＝松浦武四郎記念館蔵（三重県松阪市）

この2通の便りから北添は、龍馬の蝦夷地行きを翌年に控えて、事前に現地に赴いたが、そこで蝦夷地に精通し、書物も出している松浦武四郎の存在を知ったようだ。戻ってすぐに江戸の武四郎を訪れ、「蝦夷初航日記」などの書物と蝦夷地地図を入手したもの、と判断できる。

北添から視察報告を受け、武四郎の書物を見せられた龍馬は、蝦夷地開拓への確信を深めたのは容易に想像できる。

松浦武四郎

蝦夷地開拓へ

翌元治元年（1864）6月2日、龍馬は同志50人を黒龍丸に乗せて神戸を出帆し、江戸に着いたのが6月17日。これは幕府神戸海軍伝習所長をしていた勝海舟の日記に見える。ところが航海中の6月5日夜、京都・池田屋で勤皇の志士らが新選組に襲われ、13人が闘死する事件が起こった。その中に北添ともう一人、同志で神戸海軍伝習所生の望月亀弥太が含まれていた。

これを伝え聞いた龍馬は、海舟に迷惑がかかると判断し、蝦夷地行きを江戸まで来た段階で中止した。龍馬にすれば蝦夷地の的確な情報も握っており、行こうと思えばいつでも行けるという思いだったのであろう。

夢の消滅

龍馬の読み通り、海舟は海軍伝習所長を免職になり、伝習所は閉鎖される。しかも龍馬が望む肝心の蝦夷地行きは、いろは丸の衝突沈没などでうまくいかない。致命的だったのは準備した大極丸に、イギリス水兵2人を殺害した犯人が逃げ込んだ疑いで、自由に動けなくなったことだ。将軍徳川慶喜により大政奉還が決まり、龍馬を感激させるが、その直後、京都・近江屋に滞在中、何者かに暗殺され、蝦夷地行きの夢は消滅する。

龍馬の夢を潰したものが、京都で起こった新選組による池田屋騒動なのは明らかだが、その後に蝦夷地箱館へ赴いて戦死した土方歳三や、分裂後に逃れて蝦夷地松前藩に至り、医師の婿養子になった永倉新八などを思うと、見えない糸に操られたような人生の不思議さを感ぜずにはいられない。

坂本龍馬

赤れんがと東京五輪マラソン

高知大学短期研究員
前田　桂子

２度目の東京五輪は、新型コロナウイルス禍の緊急事態宣言下での開催であったが、勇敢なアスリートたちのパフォーマンスに感動の嵐を受けた毎日であった。そして、閉会式で高知県宿毛市出身のソプラニスタ岡本知高さんが、故郷の清流仁淀ブルーをイメージした鮮やかな衣装をまとい、五輪賛歌をダイナミックに熱唱、２０２０東京五輪を格調高く締め括り、高知県人として誇らしく感じた。さらに、私は札幌で開催されたマラソン競技に釘付けになった。それは10年前から『北海道開拓に貢献した高知県人』の調査で訪問した旧北海道庁本庁舎（赤れんが庁舎）および北海道大学構内の赤い屋根が目を引くモデルバーン＆クラーク博士の胸像が、周回コースの為に何度も放映されたからである。

今回のオリンピック会場に選ばれた札幌は今や日本五大都市、その人口は２００万人ともいわれている。最初にその創成期の札幌についてふれたい。

「御用火事」首都札幌の建設

新政府は北海道の開拓を総判する「開拓使」を設置。１８７０（明治３）年、本庁が函館より札幌開拓使庁に移庁、鹿や熊が出没する人煙稀な原野に遠大な市街計画の立案であった。それを引き継いだ岩村通俊判官（高知県宿毛市出身）は、首都札幌の建設に当たった。１５０年前、当時の街並みはカヤ造りの草小屋、開拓成否のカギは火災予防であり、「草ぶき屋根を禁止、家作料１００円を貸与、柾葺き屋根の本建築」を奨励したが、貸付金を酒食に使う者が多く、改築は一向に進まない。これに業を煮やした判官岩村通俊は、翌年４月、自ら馬に乗り、通知したうえで延焼防止のため消防組もひかえさせ、まず官庁建物の草ぶき倉庫を焼き払い、町家の草小屋も焼き払った。大胆な放火による都市改造を世間では「御用火事」と伝えている。１８７２（明治５）年、岩村は大判官に昇進。

開拓使官員（中央・岩村通俊大判官）北海道蔵

やがて１８７３（明治６）年に札幌本道が完成し碁盤目の基礎がおかれ、官地の中央に開拓使札幌本庁舎も完成、北海道開拓の足場ができた。ところが１８７９（明治12）年に札幌本庁舎が全焼。その後、開拓使は廃止され、１８８６（明治19）年、北海道庁の設立で初代北海道庁長官に岩村通俊が就任、旧北海道庁本庁舎（赤れんが庁舎）の建設に着手、１８８８（明治21）年に完成。その後に内部火災もあったが復旧され現在に至る。「赤れんが」とも呼ばれ、札幌のシンボルとして親しまれている。高知県人として名誉に感じる。

次に、札幌・赤れんがに係る私の思い出の中から3例を挙げたい。

クラーク博士とモデルバーン

北海道大学の前身である札幌農学校は、東京大学より1年早い１８７６（明治９）年に開校、開拓長官黒田清隆の主導で開拓使官吏養成を目的に、専門教師としてウィリアム・スミス・クラークを一ヵ年の契約で招聘した。外国人教師による英語教育を徹底、日本最初の「農学士」の称号が授与され、手厚い官費生の近代的大学として位置づけられたが、卒業後5年間は開拓使に従事し、北海道への編籍が義務づけられた。初代教頭クラークは同校の基礎固めに意欲を燃やし、厳しい進級試験に第1期生24人の中で卒業生は13人となり放校生徒が続出した。卒業生の中に土佐藩士子弟の内田瀞（きよし）・黒岩四方之進（よものしん）・田内捨六のエリートがいた。彼らは士族中心の知識人社会に育った3人であったが、マサチューセッツ農科大学に由来した教育理念とキリスト教的教育を受入れ、クラーク教頭の賞讃を得る成績を示し「土佐ボーイ達」と愛され、開拓使御用掛として北海道開拓事業にその英知を注いだ。

なお、クラーク博士は「日本国ニ要スル農業ノ修整」の論文を『札幌農黌第一年報』に発表。その内容は、北海道の風土に適した有畜農業経営の確立を提言。クラーク博士の構想に基づき、日本最初の洋風畜舎モデルバーン（模範家

畜房）を建設。その後これに倣って根室などの各勧業課試験場に洋風畜舎が建設され、北海道近代酪農発展に大きな役割を果たした。北海道大学農学部第2農場内に9棟の実習施設が現存しているが、現在はモデルバーンと穀物庫が内部公開されている。

加えて、1926（大正15）年、北海道大学は創基50周年およびクラーク胸像除幕式（中央講堂前）を挙行、高松宮が差遣され、3400人が参加。その年はクラーク生誕100周年にあたり、直弟子である1期生の内田瀞・黒岩四方之進たちが参加された。ところが、太平洋戦争中の金属類回収令により供出、現存は二代目像である。

北海道議會議事堂 議長前田駒次の肖像画

私は2011（平成23）年7月、70歳の時に高知短期大学卒論の課題調査で、北見市・浦臼町を中心に先人たちの子孫を訪ねた。その折、北光社移民団の責任者であった前田駒次（本山町出身）の北海道議会第12代議長の肖像画の調査で北海道議會議事堂を訪ねた。当時の議事堂は北海道庁旧本庁舎（赤れんが庁舎）左横に建っていた。

なお前田駒次は1893（明治26）年、武市安哉率いる聖園農場先発隊の一員として浦臼に入植したが、1897（明治30）年に請われて北光社に移った。北光社社長坂本直寛は4ヵ月足らずで現地を去り、副社長澤本楠弥も7年間の滞在で帰郷、農業指導員であった前田駒次は現地支配人となり北光社農場の運営に携わった。貧窮にさいなまれながらも鉄道敷設、銀行・公共施設誘致など北見繁栄の基礎を固められ、実に四半世紀に及び道政に参画。「北見の父」と敬慕され1945（昭和20）年、87歳、北見市初めての市葬がとり行われている。

さて、北海道議会事務局担当者は、玄関まで出迎えてくださり「子孫の方が議長肖像画を見に来られることはあるが、大学の研究では初めて」と、壁一面に天井まで隙間なく並べてある歴代議長の肖像画の中から、上段に飾られていた立派な額におさまった前田駒次の肖像画を、高い脚立を使用して下ろしてくださった。濃密な油絵の肖像画を手元で拝見でき懇切さに感無量、思い出深い資料の一つとなった。さらに議場へも案内いただいた、議場内は全国唯一の馬蹄形であり、正面は大理石で装飾、天井に雪の結晶をイメージした道章を中心に会場を覆う円形の照明が施され、気品さに一驚したことであった。玄関まで見送って下さった担当者の「贅を尽くした議事堂以上のご厚意」を今も忘れることはできない。

その議事堂は撤去され、2020（令和2）年、北海道庁本庁舎に隣接した位置、すなわち、赤れんがと同敷地内の後方に新築移転。歴代議長肖像画は一般開放エリアに掲げてあり予約なしで閲覧可能と聞かされた。

北海道立文書館 根釧原野に高知小中学校

2015（平成27）年6月、74歳の時、高知大学修士論文の課題調査で、オホーツク地域（興部・滝上・紋別・湧別・北見・訓子府）、根室地域（中標津・別海・根室）、釧路地域（弟子屈・標茶・厚岸・浜中・釧路）を中心に高知県からの移住者の子孫を訪ねた。許可移民制度は、昭和初期に限界地帯と言われていた根釧原野への移住であった。そこに厚岸町立高知小中学校（土佐団体が別寒辺牛特別教授場を開設、高知尋常小学校に昇格）が開校されていた。しかし生徒激減のため2019（平成31）年4月から休校となってしまった。

加えて公蔵資料を探して2015年11月、赤れんが庁舎内に開館されている北海道立文書館を訪ねた。同館所蔵の『北海道国有未開地処分完結文書・許可移民台帳』53冊を全頁くまなく確認しながら高知県関係者を探し出す作業であった。資料は地下2号書庫から学芸員がブックトラックで5冊ごと運搬。時代は昭和初期であり、薄い習字紙の粗悪品のような素材でめくりにくく、分厚さにも狼狽。閲覧室への私物持込不可、カメラのみ可と制約もあり、予想以上に手間がかかり困惑。そこで、開館前に玄関で待ち、昼食は取らず閉館まで粘り、椅子に座らず見落としなくスピードを上げ資料撮影、同館学芸員の方々の好意的対応に助けられて、一週間で700枚ほど撮影できた。その後に落度のあることが判明、翌年2月に再び同館を訪問する羽目となった、苦くも意気込み充実感を噛みしめた思い出がある。

冬の赤れんが庁舎
（高知大学大学院「修論」発表時のタイトル画面）

初代北海道庁長官岩村通俊の偉功「赤れんが」の館内で、修士論文の調査に没頭できた幸せを大切にして行きたい。ところが文書館も2020（令和2）年4月、江別市にある道立図書館の横に新装移転されたと聞く。

ともあれ、札幌で開催された東京2020オリンピックのマラソンコースは私にとってビッグプレゼントとなった。

こぼれ話 ― 犬歩棒当記（四十七）―

藤原彰子と島津篤子

宮川　禎一

筆者の得意は平安時代の藤原道長だ。寛弘四年（一〇〇七）に大和国の金峯山に登って埋めた金銅藤原道長経筒（国宝）の担当者が筆者だからだ。登山の翌年に一条天皇の中宮であった長女の藤原彰子に皇子（敦成親王）が誕生し、のちに後一条天皇になったことにより道長政権は盤石となったというのが平安時代史だ。強力な藤原氏本流左大臣家（摂関家・のちの近衛家）が天皇・皇室を後見する構造である。

よく似た話が幕末にもある。後世の我々は「歴史の結果」をよく知っているので、すべての事象が明治維新に向かって進んでいたと解釈しがちだ。しかし安政年間に生きていた人々は未来に維新が来ることを知らない。

薩摩藩主の島津斉彬は名君とされ、開明的で視野も広く、人望が厚かった。この斉彬が安政三年（一八五六）十一月に養女篤子（篤姫）を近衛家経由で十三代将軍徳川家定のもとに正室として輿入れさせたのは「家定の後継者に英明な一橋慶喜を指名させるため」というのが「歴史」なのだが、大樹公が病弱だなどとどれほどの人が知っていたのか。普通に考えれば徳川将軍家に娘を正室として嫁がせて、男子が産まれればお世継ぎであり、次期将軍だ。島津斉彬が幼い将軍の外祖父として幕府内で強大な政治力を発揮できるという「未来図」を老中阿部正弘や薩摩藩は描いていたのではないか。島津斉彬＝藤原道長だ。

道長は長命し、中宮彰子は二人の皇子を生んだので十一世紀史は藤原摂関政治の最盛期なのだが、もしも彰子に皇子が生まれていなければ定子の産んだ第一皇子（敦康親王）が次代の帝であったはずだし、定子の兄弟である藤原伊周・隆家（中関白家）が政権を担当したはずだ。

安政年間に戻れば、安政四年六月に阿部正弘が死に、安政五年七月六日に将軍家定が死に（篤姫に男子は生まれず）、島津斉彬も十日後の七月十六日に急死して、その未来図は瓦解した。しかしすべてがうまく進んでいれば強力な薩摩藩が徳川将軍家（島津家の血をひく幼将軍）を後見する構造が成立したかも知れない。戊辰戦争を経た「明治維新」とは全く異なる「幕藩体制のままの近代化」が起こったのかも、などと思う。

藤原道長が建立した法成寺の跡地
（京都市上京区荒神町）

“話してみるかよ”

― 龍馬像のつぶやき ―

岡﨑　洋一郎

2019年5月1日元号が令和となった日本・・・けんど日本をふくむ世界が今はコロナ禍に翻弄されて大変なことじゃ。振り返ると幕末の日本も混乱と騒動の時代じゃった。わしは1835（天保6）年11月15日に生まれ、1867（慶応3）年11月15日33歳のとき凶刃で落命。明治、大正と約60年経た1928（昭和3）年に土佐の青年や学生等のエネルギーで、わしにはもったいない立派な龍馬銅像を桂浜の丘に建ててくれたがよ。

日本海軍の軍艦が土佐湾にきて盛大に祝うてくれてたまげたぜよ!

歳月は流れ35年後の1964（昭和39）年から日経新聞夕刊に司馬遼太郎さんの小説『竜馬がゆく』の長期連載が評判となり、やがて文芸春秋社から出版され、続いて文庫本も出た。その後の人生ドラマがこれほど人気沸騰するがにびっくりしたぜよ！勢いがつくのは怖いのう。NHKの大河ドラマ＜龍馬伝＞が2010（平成22）年放映されたが、これが又こじゃんと盛り上がってのう。わしのこればあ長期の人気には、ちっくとおだてが過ぎてつべがこそばい気がしたぜよ。

1991（昭和60年）わしの生誕150年の節目を記念して、全国各地からの募金や高知県人会等の協力で、浦戸城跡に1991（平成3）年「高知県立坂本龍馬記念館」が完成したがよ。今年4代目の吉村館長までは、小椋（初）森（2代）髙松（3代）館長の運営企画と努力は素晴らしく、目を見張ったもんじゃ。わしの手紙や遺品等資料の蒐集、館の増築充実に頑張ってくれた。感謝感激をしちゅう。

湾をつなぐ浦戸大橋も架かり種崎の東には外洋新港も出来た。龍馬ファンの会も賑わいよった。さて桂浜にわしの銅像が建って100年がせまってきたが、湾や周辺の変化発展の裏側では浦戸の家並みも寂れが目立つ。又浜の5色石も、土佐犬の喰い合わせも今は消えた。地球環境の変化も気になる。これも新しい時代の流れじゃろうか?縮小均衡の時代かも知れん。

今一番気になる事は、高知県の人口は約70万が50万人に減るがぜよ。
子どもの減少が進み、教育現場の変化や、仕事の後継者不足の話があちこちで聞こえる。市民に愛された桂浜公園の土産物店や駐車場周辺の整備計画が動き始めた。「桂浜荘」も高知市は指定管理で運営を切り替えると聞いたがなかなか難しいのう。

観光の形態も変わっていく中で、銅像のわしとしても、喜び満足してくれる桂浜公園であるように祈りよる。「高知県立坂本龍馬記念館」や桂浜水族館の今後についても愛され世界に羽ばたくよう皆さんの知恵と工夫で応援を頼むぜよ!

コラム・龍馬のこと

「龍馬のような、大きな人に」

京都府立大学文学部歴史学科１回生
依田　萌奈

初めまして。昨年3月に現代龍馬学会に新たに入会いたしました、大学1回生の依田萌奈です。龍馬さんのことをもっと勉強して知りたいと思っています。これからどうぞよろしくお願い致します。

最初に、龍馬さんと私の出会いについてお話ししたいと思います。私は四国出身である上に、一番下の弟の名前を龍馬さんのお名前にちなんで「竜真（りゅうま）」と名付けるほど龍馬さんのことが大好きな両親のもとで育ったということもあり、幼い頃から龍馬さんを身近に感じていました。小学校高学年から司馬遼太郎氏著『竜馬がゆく』を読み始め、龍馬さんの人間性やその行動力に魅了され心酔していきました。

大学受験期は大変でしたが、龍馬さんを愛する高知出身の方から龍馬さんの写真パネルを頂き、勉強机の前に立て掛けて常に龍馬さんに見守ってもらい、心が折れそうな時は龍馬さんの熱い志を思い出して「自分も夢に向かって精一杯努力しよう!」と決意を新たにし、モチベーションにしていました。

龍馬さんのことを「人たらし」と表現したものをよく目にしますが、龍馬さんの人を引きつける力は、今を生きる私にもたくさんの方々とのご縁をもたらしてくれているように思います。本学会への入会を勧めてくださった前田由紀枝先生はじめ龍馬さんの話題で語り合った人々や先日龍馬さんの足跡を求めて、初めて1人で旅に出た長崎の地でも龍馬愛あふれる多くの素敵な方々と出会うことができました。龍馬さんはやはり人物だとひしひしと実感しています。

最後になりますが、そのご縁に感謝しつつ志を大きく持って、龍馬さんに少しでも近づけるように自分なりに夢に向かって走り続けようと思います。

高知県立坂本龍馬記念館・現代龍馬学会
〒781-0262 高知市浦戸城山830
TEL（088）841-0001　FAX（088）841-0015
mail:gendai-ryoma@kochi-bunkazaidan.or.jp